50万冊に達するという，いわば図書の洪水から起る各種の「書害」をうけている館に働く者としては，館長以下８人の方々で館務を遂行しておられるこの館が，どこもゆったりと大き目で，しかも各種の新しいアイデアや，装置をとりいれ，どこまでも明るい新館が，羨しくてたまらなかったというのが本音であった。ただ，この館を見学して学んだことを，今後，焦眉の急を告げている私たちの新館建設にどう生かすべきなのか，大学の規模，館の果すべき機能，蔵書数などが全く違うために，それがもうひとつわからないというのも偽らざる気持であった。

終りになったが，姫路工大の館員各位には御多忙中を一貫して御親切に御説明，御案内下さり，心からの謝意を表するものである。

第２回情報図書館学夏期シンポジウムに参加して

附属図書館　三　浦　勝　利

第２回情報図書館学夏期シンポジウムは去る７月12日（土），午前10時より280余名が参加して東京大学理学部化学教室講堂で開かれた。藤原鎮男教授（東京大学情報図書館学研究センター長）の挨拶の後本題に入った。なお，第１回シンポジウムは昨年７月科学研究費による特定研究の中間報告として開かれている。

文部省科学研究費補助金による特定研究「大学図書館における情報処理トータルシステムの開発」は昭和53年度藤原教授を中心に総括および調整役の幹事会と３つのグループにより発足したものである。

第１班（大学図書館トータルシステムの分析と設計）においては，東京学芸大学・電気通信大学共同システムの運用の評価を中心に，目録を除く各業務について従来の機械化の問題点，システム設計の目標，新システムの基本構想が検討され，専用システムによるネットワーク形成の必要性が説かれた。

第２班（ＬＣ－ＭＡＲＣオンライン利用実験）においては，筑波大学，千葉大学，東京大学附属図書館，東京大学農学部，東京工業大学，一橋大学，名古屋大学の各図書館が，それぞれ200～250件のサンプル・データをとり出して電話回線を利用し，オンライン検索を行ったものである。主として目録作成の参考資料，文献検索業務への応用，収書・選書ツールとしての有効性について評価がなされ，実験途中にセンター館である筑波大学のＩＤＥＡＳ／77のシステム変更等もあり全体的にみて細かい点を除けばかなり良い結果が出ているように思われた。特に，筑波大学の実験において，５年間ファイルを保存すると50％のカバー率が保てるとの結果が出たことは今後の全国中枢センターによるOn-Line Shared Cataloging Serviceを推進する場合の大きな指針となるであろう。しかし，ＪＡＰＡＮ－ＭＡＲＣ（昭和56年４月よりサービス開始の予定）の利用実験とローカル・インプットの問題がとり残されたのは非常に残念である。

第３班（オンライン学術雑誌総合目録処理システム）は，学術雑誌総合目録，人文・社会科学欧文編の編集経過報告および，学術雑誌総合目録システムにおけるデータ・ベースのオンライン化への予備的研究として，略誌名によるアクセスと略誌名の自動生成手法について検討を加えたものである。

以上３つのグループの研究成果について報告されたことを極く簡単に記した。この後，「これからの大学図書館」と題してフォーラムが開かれ，

１，研究図書館の相互協力
２，大学図書館におけるデータ・ベースの必要性と図書館員の養成
３，国際的視野からみた日本の図書館の立場，
４，大学図書館の機械化について

の題目で４人の講師各15分の限られた時間で講演が行われ，質疑応答に入った。いづれも興味深いテーマばかりで，また日を改めてたっぷり時間をとって拝聴する機会がもてるよう熱望する次第で

ある。

最後にセンター長藤原教授の閉会の辞があって午後5時30分散会した。

数理解析研究所図書室　中　司　里　美

7月12日東京大学において開かれた標記のシンポジウムは，特定研究「大学図書館における情報処理トータルシステムの開発」の報告4件と，フォーラム「これからの大学図書館」というプログラムであった。理解の届かない部分もあったが，プログラムに沿って，印象，感想などを述べる。

特定研究は昭和53年度より2か年にわたり，3班に分かれて行なわれたものである。当日配布の要項によると，第1班は図書館業務自体，第2班は学術情報のうちモノグラフ，第3班は逐次刊行物，をそれぞれ研究対象としている。午前中の2つの報告―柴田正美「学術雑誌総合目録　人文・社会科学欧文編データベース」と根岸正光「学術雑誌総合目録システム」―はその第3班の報告であるが，第1班の報告「大学図書館業務処理システム」が，井上如講師の言葉によれば，〝デスクリプティブというよりはプレスクリプティブ〟であったのとは対照的に，非常にデスクリプティブであり，柴田講師の，印刷刊行をま近に控えての「学総目」についての報告は臨場感があった。作成の経過，取り扱ったデータの量など，数字と共に説明があり，「相互協力に役立つファインディングリスト」という学総目の機能上の位置づけによる具体的な編集方針が，ＯＨＰを使って実例と共に示された。ＩＳＳＮを項目として加えた理由に，完全な書誌データの作成は困難という判断があるとのことであった。自分達の日常作る書誌データは，全体からみれば1つの例なのだと意識する必要があるとあらためて感じた。

根岸講師の報告は，学総目データベースの研究として，略誌名の自動生成と検索実験，オンラインによる校正システム，学総目処理システムのための現状分析と規模推計などであった。報告は詳細で，又いかにも客観的であり，たとえば略誌名の自動生成の説明における如く，目の前の材料を，視点を定めて類型化し，処理を経て，結果を呈示する過程が明快であった。

午後の津田良成講師「ＭＡＲＣ利用システム」は特定研究第2班の報告である。ＭＡＲＣについての研究報告は，昨年の第1回夏期シンポジウムでかなり多角度から行なわれており，今回の報告は，筑波大ＩＤＥＡＳ／77による，公衆回線を使ってのＬＣ―ＭＡＲＣオンライン検索実験結果についてであった。実験評価によると，データベース自体の構造内容，検索システムにおけるデータベースの取扱い方法，さらに実際の端末操作の場面，等の各段階で様々な問題があったようである研究報告の最後，井上如講師の「大学図書館業務処理システム」では，機械化の足どりをたどり，環境の変化の説明を経て，端末館，地域センター，全国センターを要素とする壮大なネットワークのイメージスケッチが呈示された。詳しくは要項に説明を譲るとして，ここでは「前置き」として話されたことを書きとめておく。今，我々図書館員が気づかなければならないこととして3点があげられた。1つは図書館の仕事が写本時代の書誌学の伝統から抜けきれず，特に書誌記述の統一の点で遅れているということ，次に図書館は目録カードではなく，データを扱っていることに気づくべきであるということ，最後に Resource Sharing とは今や，1次文献のみを対象とするものではなく，広く人間，手段，経験をもその中に含めて考える方がよいということであった。

プログラム最後のフォーラムは雨森弘行，桜井宣隆，松村多美子，山本毅雄の各講師がそれぞれの立場から「これからの大学図書館」を論じ，質疑応答が行なわれた。状況は急速に変化していることが，指摘された。

1日のシンポジウムであったが，来たるべきトータルシステム，ネットワークの中で身動きできなくなるのでなく，今までになかった自由を獲得できるよう，毎日の仕事の意味を考えるきっかけにしたい。